

Human ヒューマン

2020.2 Vol.14

文化を学ぶ 世界と繋がる

CONTENTS

02 特集

人文学部学生の 体験的学びの紹介

04 文化遺産特別演習

06 ゼミ紹介

日本文化学科 関本 真乃 4年ゼミ (1部)
英米文化学科 仲丸 英起 3年ゼミ (1部)

07 就活応援 4年生からの体験談

裏表紙 人文学部 TOPICS

ダブルディグリー・プログラムスタート／人文学の挑戦／
インターンシップ報告／北海道観光・地域振興特別講座開催／
特別講演会・人文学会レポート



人文学部学生による海外での学びと体験を紹介します!

海外での語学研修、留学、ワーキングホリデー、世界一周体験、
人文学部では様々な体験や学びを応援しています。



1年間休学し「世界一周」へ 「やりたいことをやってみる」

福山 生
[英米文化学科4年]

私は昨年度1年間本学を休学し、世界一周をしていました。単純に「世界一周」と聞くとかなりスケールの大きい話と思われがちなのですが、実際世界中にはたくさんの日本人がいます。同じ年代の大学生、仕事を辞めた社会人などなど。

さて、私が海外に興味を持ったのは高校生の頃でした。元々ヨーロッパの風景や文化に興味を惹かれ、世界遺産についてのテレビを見たり、インターネットや本で情報を集めていました。それから本学へ入学したのですが、そこで一人の友人に出会いました。彼は高校生の頃から一人で東南アジアに行ってボランティアをしたり、その経験を生かしてNPO法人を立ち上げようとしていたアクティブな学生でした。彼の話を知っているうちに私もヨーロッパ以外の世界にも興味が湧き、気がついた時には休学して「世界一周」をしようと考えていました。

私は本学吹奏楽団に所属していますので、活動が落ち着いた4年目の6月に出発することになりました。それから1月末の帰国まで、世界中53ヶ国を旅しました。初めての海外でしたが大きなトラブルもなく無事に終わられ、非常



に楽しい毎日でした。

私の今回の経験を通して最も楽しかったことは、日本中そして世界中に友だちが出来たことです。人との出会いは私も大切にしていた部分だったので、一生つながる仲間が出来たのはとても大きなことでした。

最も大変だったのは、人種の問題です。世界中には本当にたくさんの人がいました。肌の色や目の色が違う人や、障がいを持つ人、ホームレスの人のことなど日本には分からないことばかりでした。大森一輝先生の授業で黒人差別については学んだものの、実際目の当たりにすると元々のイメージを払拭するのは非常に大変でした。今はそれを克服するためにも、さらにいろいろな経験をしたいと考えています。

最後に、私が伝えたいことは、「やりたいことをやってみる」ということです。大学4年間でどのように使うかは人それぞれですが、ぜひ後悔のない過ごし方をしてほしいと思います。



アイルランドでのワーキングホリデー 「変わりたい、 自信のある自分になりたい」

須藤 汐音
[英米文化学科4年]

ワーキングホリデーでアイルランドに来てから3ヶ月ほど経ち、先日語学学校を修了しました。環境には1ヶ月でやっとなれたと言えるようになり、美しい街並みを眺め歩き、日々楽しんで過ごしました。クラスでは同じく英語を学びに来ている、他国の学生との交流を通じ、語学の上達だけでなく、様々な国の事情や文化を知ることができました。そして、ホームステイ先では優しさや温かい心を感じ、安心して生活することができました。

また、語学学校に通いながら、仕事と次に住む場所を探していました。いろいろと探そうと住み込みでのホテルの求人を見つけ、面接を受けて無事に仕事が決まりました。そのため、これから5ヶ月は仕事をし、最後の1ヶ月は働いて貯めたお金でヨーロッパの国々を旅行したいと考えています。

こんなに充実した日々を過ごせているのも、私の決断を許してくれた家族のおかげです。私の頑固な性格をよく理解し、留学をしたいという私の意志を尊重してくれました。本当に恵まれています。

決断をした後は、留学までの過ごし方の計画を立て、アルバイトで資金を貯め、自分なりに迷惑や心配をかけないよう努力しました。



留学を決断した1番の理由は、「変わりたい、自信のある自分になりたい。」と思ったことです。今までの自分は恵まれた環境に甘え、様々なことに言い訳をつくって逃げていました。そんな自分を変えるために、全くちがう環境で生活したいと思ったのです。

また、就職をしてからでは留学が難しくなることや、本学は休学費が不要であることも決断の後押しとなりました。

環境を変えることは、身の回りに変化が起き、様々な経験をして、新たな何かが見つかり、良いことも悪いこともあると思いますが、糧にしていけると思っています。

そして私は今少しずつ変わっているように感じます。この環境で自分なりに努力し、沢山のことを吸収し、考えることができています。やりたいことや、夢、目標も増え、大切にしている感情や軸も見えてきました。将来私がこの生活から得た経験を活かせるよう、これからもアイルランドでの生活に精進していきます。





カナダ留学体験記

「常に英語で会話することが 英語力向上の近道」

後藤 怜

【英米文化学科3年】

近年、海外留学する学生の数が増加傾向にあると思います。しかし、留学はしたいが現地での生活がイメージできない、英語を話せないまま留学して大丈夫なのかなど、様々な不安から留学する覚悟を決められない人が多いのではないのでしょうか。私はいま、EFという語学学校の約11ヶ月プログラムを利用し、カナダのバンクーバーに留学しています。カナダは治安や立地条件の良さ、訛りのないきれいな英語を学べるという理由から留学先としてとても人気のある国の一つです。ここでは、私がバンクーバーでの生活を通じて感じたことをお伝えしたいと思います。

カナダは積極的に移民を受け入れている多民族国家のため、様々な人種や文化に触れることができます。多様な経験ができるなかで私が印象に残っているのは、カナダ人は優しくフレンドリーな人が多いということです。スーパーでの探し物や道を尋ねたとき、みんな笑顔で答えてくれま



した。また、私が英語をあまりうまく話せないということを伝えると、ゆっくり話してくれたという経験を何度もしました。こうした現地の人々の温かさに触れることができるのはバンクーバーの魅力の一つだと思います。

私は以前にもバンクーバーアイランドに1ヶ月の短期留学をしていたため、今回が二度目の留学です。私が二回の留学を通じて強く感じたのは、常に英語で会話することが英語力向上の近道だということです。最初は不安や恥ずかしさで英語を話すことに抵抗があると思いますが、文法や単語を間違えていても英語で話そうとすることがとても重要です。自分の言いたいことがうまく伝えられた時の達成感、勉強のモチベーションが上がると同時に友達との距離も一気に縮まります。皆さんが留学した際は、日本人同士でも英語で会話することをぜひ意識して欲しいと思います。



3週間のオーストラリア・シドニー留学

「留学は、自分を変える 体験の一つ」

齋藤 千夏

【英米文化学科4年】

私は、大学1年生の時に春休みを利用して、3週間オーストラリアのシドニーに留学をしました。私は、人生初めての留学ということとても緊張していて、留学する前は無事に過ごせるのかとても不安でした。留学前は英語の勉強をし、きちんと留学先のことを念入りに調べてから旅立ちました。

シドニーに到着して、私はホストファミリーのお宅に入りましたが、最初はどうにもコミュニケーションを取っていかかわらず、あいさつ程度の話しか話せないほど緊張していました。それでも、ホストファミリーは、そんな私を温かく迎えてくれました。ホストファミリーの家族は、兄弟4人、お父さん、お母さんの6人家族でした。英語をうまく話そうと思っても話せない自分に対して、趣味や日本の話題などを聞いてくれて、英語で話すことが怖いと感じていたのに、だんだんと英語で話すことが自然と楽しいと思えるようになりました。



また、学校生活では友達も少なく心配しましたが、同じクラスの子が積極的に声をかけてくれて、みんなが助け合いながら勉強をすることができ、毎日が楽しいと感じるようになりました。そして、学校以外でも一緒に買い物をしたり、出かけたりなどして、一緒に英語を勉強している仲間と有意義な時間を過ごせてとてもうれしかったです。留学したことによりたくさんの国の人と英語でコミュニケーションを取る楽しさを知り、文化についても学ぶことができたこと、海外生活の経験が改めて自分を見直す良い機会になったこと、価値観や視野が広がったこと、大学生活でこのような体験が出来たことにとても感謝しています。最初は英語で話すことは怖い、失敗するのは怖いと思ってしまうかもしれませんが、挑戦してみないとわかりません。留学は、自分を変える体験の一つだと思うので自分自身を変えたい方、留学したい方は積極的に行動すると良いと考えます。



人文学部では、カナダのブロック大学・レスブリッジ大学での語学研修・ホームステイを含む「英米文化特別演習Ⅱ」(3週間プログラム)と「国際文化特別演習」(14週間プログラム)を開講しています。

さらに今年度から、齋藤千夏さんの留学経験のように自分で行き先を選び、自主的に行う留学でも単位取得が可能となりました。皆さんの多様な学びを応援します！

※英語圏の大学キャンパス内の語学学校で3～4週間、授業や課外活動に参加して、修了証と報告書を提出することにより、「英米文化特別演習Ⅲ」として2単位が認定されます。

2019年度

文化遺産 特別演習

文化遺産特別演習は、日本にある文化遺産を実際に訪れることで、日本と世界との関係性を考える現地体験型アクティブ・ラーニング形式の特別演習として、本年度より開講されました。

この授業のテーマは、日本各地にある世界遺産の周辺で5泊6日の研修旅行を行い、「歩く、見る、聞く」学習を通して、日本文化とその世界的な意義についての理解を深めることにあります。本年度は「瀬戸内の環境・文化と戦争の歴史」をテーマに、広島・山口方面で実地研修を行いました。

学生は、4月から9月にかけて実施された事前学習をふまえ、9月16日（月）から9月21日（土）の5泊6日の日程でフィールドワークを、帰札後の9月28日に研究発表を行いました。ここでは、参加学生の声を紹介します。

リアルを学ぶフィールドワーク

宮島 睦貴

日本文化学科
2部2年

文化遺産特別演習は、日本各地の文化遺産を訪れ、その歴史と文化を学ぶいわばリアルな授業です。現地に行くまでに入念な事前学習を重ね、歴史が苦手な方も安心して参加できます。そして、数多くの教科書には載っていない現実を学び、新たな発見がありとても有意義な時間を過ごすことができます。

今回私たちは、広島・山口の二県を訪れ、平安末期から戦後までの幅広い歴史に触れました。その前に、私は歴史の暗い部分である戦争の悲惨さを伝える資料館が、今後どのような役割を果たすことができるのかということに重点を置いて、調べ学習を行いました。事前学習期間では、今回訪れた戦争関連の資料を取り扱っている資料館二か所について調べ、それぞれの特徴と扱っている資料について情報を集めました。その際、一緒に参加した社会人学生の方にも意見をいただくことができたので、事前準備としては十分な情報が集まりました。

六日間の演習では、事前に得た情報と現地の資料を比較して、知らなかったことや誤解していた部分を洗い出しました。訪れた両資料館では戦争の悲惨さを伝える多くの資料を扱っていました。しかし、それ以上に実際に見た現地の雰囲気は、戦争の根絶と核なき世界を訴えかけてくるような何かがありました。原爆ドーム前には、全国各地から千羽鶴が寄贈された場所があり、それを囲むようにして多くの小学生が平和への宣言を読み上げ、歌を歌っていました。原爆資料館周辺のいたるところで平和を願う歌がスピーカーを通して聴こえてきました。現地に行かなければ、知ることはなかったので、とても良い経験になったと思います。

六日間を通して、「戦争への認識」に対する地域差を特に感じました。同じ広島でも少し離れれば、戦争への異なる視点に出会えます。教科書ではひとつくりにしてしまうところを、一つ一つ注意して見ていくことができるという点に、現地調査の意義があると思います。費用はかかりますが、大学を出た活きた学びを体験することができる良い機会だと思っています。



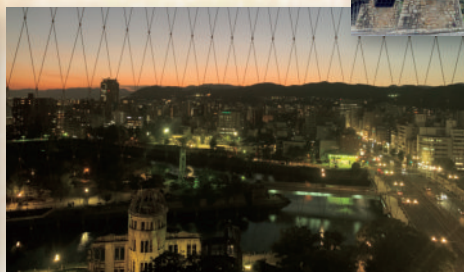
文化遺産特別演習を通して感じたこと

今回文化遺産特別演習の授業で一番印象に残っているのは、広島県にある「おりづるタワー」である。おりづるタワーは世界遺産、原爆ドームの隣に位置する新しい観光名所である。コンセプトは「世界文化遺産と共存し得る建物」となっている。13階の展望台スペース「ひろしまの丘」からは原爆ドームと、爆心地を含む広島市内を一望できる。私はその日、おりづるタワーに行く前に、平和祈念資料館で太平洋戦争時に広島で起きたこと、当時の人々の生活などを知った。さらにガイドさんからは当時の話を直接聞き、多くのことを学んだ。平和祈念資料館のガイドさんは戦争体験者だった。その人の言葉で「毎日勉強して、家族とご飯を食べて、友達と遊んで、好きな人とデートして…。そんな当たり前と感じる毎日を当時の子どもたちは過ごせなかったんだよ。」と、涙ながらに語っていたのが印象的だった。実際に戦争を体験した人の言葉だからこそ、深く胸に響いた。その言葉を思い出し、今こうして自分が何事もなく、大切な人たちと時を過ごし、好きなことをする時間があって、日々を過ごせているということに尊さを感じた。おりづるタワーは、普段なら意識して考えることのない、日常のありがたさを思い返すきっかけとなる場であり、広島の過去と現在について考えることのできる空間、そして未来への想いが生まれる場所だと感じた。

今回の研修では多くのことを学び、感じ取り、考えさせられることが多かった。それは、実際に来てみたいと経験することのできないものだったと思う。私にとって、考え方を広げる貴重な体験ができた研修であった。

松平 純香

日本文化学科
1部1年



萩澤 雄大

英米文化学科
1部1年



文化遺産特別演習について

私は、文化遺産特別演習で5泊6日の広島研修旅行に参加した。以前から世界遺産に興味があり、この授業を通して深く学んでみたいと思い参加を決めた。実は、広島には高校時代の修学旅行でも行ったことがあり、この授業でも広島に行くとなると聞いたときは、再び現地を訪れてもっと自由に学ぶことができると思い、楽しみにしていた。実際に行ってみると予想以上の人で、外国人の観光客も多く、やはり遠くからでも来る価値のある場所なのだと、実感した。

特に印象に残ったのは、平和記念公園だ。小学生の団体がとても多く、驚いた。様々な表現で、原爆の悲惨さ、同じあやまちを絶対におかしてはならないということが、心に伝わってくるのだ。このために小学生が平和教育の一貫でたくさん来るのだと納得した。小学生に限らず、世界の人々が平和に共通した解釈をもつためには、広島を実際に訪れるのが一番だと確信した。資料館の中は、高校2年生の時に来た時からリニューアルされており、絵で表現された原爆投下後の人々や、被爆者の遺品などがたくさん置かれていた。高校生の時より、ダイレクトに戦争はダメということが心に伝わってきて、終始心が苦しかった。そして、実際に原爆が落とされた当時、生活していたボランティアの方に案内していただいた。今では想像できない生活、人々の考えなど、貴重なお話を聞くこともできた。この話から、自分たちの世代は、どのように戦争と向き合い、どのように継承していけばいいのかと考えるきっかけになった。

実際に広島研修に行くことで、新たな視点を得ることができ、一緒にいった友達の考えも知ることができた。一番効率のよい学びの方法だと思った。そして、その地への興味関心が湧いたので、深い学びができた演習旅行となった。



日本文化学科

関本 真乃
4年ゼミ(1部)
【日本中古中世文学】



私のゼミでは、日本の古典文学を学びます。3年生の1学期は、『源氏物語』の原文をテキストとし、正確に読解する力を身につけることを目指しました。2学期は読解に加え、己の関心に基づき見出した問題について各自が発表し、議論を重ねました。

4年生の現在は、『源氏物語』や文学作品を中心に、それぞれが研究に取り組んでいます。

『源氏物語』を読むとき、辞書の定義をそのまま当てはめて現代語訳を作るだけでは、読み解いたとは言えません。

たとえば「うつくし」と「らうたし」の意味の違いは何でしょうか。いずれも「かわいらしい」と訳されることも多いことですが、どのような相手に対して用いられるのか、そこにどのような感情が含まれているかが異なっています。ですから、具体的に用例を調べ、そのことばの意味を正確につかむ必要があります。

そのうえで、登場人物の心情や行動について、さらには普遍的な人間のあり方について分析します。そのためには古典作品に表れる価値観、制度、文化などを理解しなければなりません。現代に生きる「あなた」の常識を



相対化して向き合わなければ、古典は先人の智慧を示してくれるどころか、「退屈で難しい」ままです。

一見理解できないものごとを感情的に否定するのではなく、いったん柔軟に受け止めてみましょう。そして、なぜ否定したくなるのか、なぜそういう制度や文化が存在したのか考えてみましょう。

常識を疑い、視野を広げることは試行錯誤がつきものですし、苦しみも伴うかもしれませんが、その先には、人間を読み解く興奮が待っています。

自ら問い、自ら答えを見出そうとする姿勢・経験は、価値観が激変していく現代社会を生きるうえで、いくばくかのヒントを与えてくれるはずです。

ゼミ紹介

英米文化学科

仲丸 英起
3年ゼミ(1部)
【イギリス近世・近代史】



仲丸ゼミでは、イギリスの近世・近代史について学びます。3年生の前期には、日本語の文献を使用してイギリスの歴史に関する基本的な知識を身につけます。3年生の後期には、前期で習得した知識をもとに平易な英語の概説書を読みますが、文法通りに英語を日本語に置き換えるのではなく、書かれている内容を理解することを目指します。

ヨーロッパの歴史を研究することに、どのような意味があるのでしょうか。イギリスでは、人類史上初めて議会が国王の権力を制限し、民主政治が進展してゆきました。また産業革命に端を発する科学と技術の結びつきは、各国で近代化を促進しました。その一方、イギリスを筆頭とするヨーロッパ列強が行った植民地支配により、支配する側と支配される側が明確に区分され、特定の人種・民族に対するいわれのない差別や、社会階層や地域間の経済的格差といったゆがみもまた、世界にもたらされました。

第二次世界大戦後の日本では、市民革命の達成や議会制民主主義の確立、工業化の進展



など、長らく「あるべき」イギリス像のみが語られてきました。しかし、こうした近代化の反動が明瞭な形で表れてくるようになった20世紀末になると、実際に「あった」イギリスを探求しようとする傾向が強くなってゆきました。

歴史を学ぶ一つの効用は、鏡としての過去を通して自らが生きる時代や場所を相対化することです。しかし肝心の鏡が曇っている、十分に自己を見つめ直すことはできません。学生の皆さんには、イギリスという鏡を磨き上げるような研究を期待したいと思います。

人文学部 TOPICS

ダブルディグリー・プログラムがスタートします！

ダブルディグリー・プログラムとは、レスブリッジ大学（カナダ）に長期留学し、本学とレスブリッジ大学の両方を卒業できる制度です。カナダ有数の州立大学であるレスブリッジ大学と本学は、昨年12月に本プログラムの協定を結びました。2020年度以降の人文学部入学生は、この新しい制度にチャレンジできます。両大学に学んで学位を取得するため、最短でも5年はかかる見込みとなりますが、日本と北米の両方を拠点として国際的なキャリアを目指す人にとっては、大変魅力的な選択肢だと思います。さらなる詳細については、4月のガイダンスにご参加ください。



人文学の挑戦

人文部教員の研究成果を広く社会に還元するイベントである「人文学の挑戦」を、紀伊國屋書店札幌本店インナーガーデンや図書館で開催しました。今後もさまざまなテーマを取り上げ、人文学の魅力を発信いたします。次回は3月29日（日）15時より「映画と分身 - 黒澤明 × 北野武」を開催します。詳細は、学部HPやFacebookなどでお知らせしますので、ぜひお気軽にご参加ください。

2019年7月28日（日）
第21回「英語から英文学へ」
斎藤兆史（東京大学大学院教育学研究科教授）
森川慎也（北海学園大学人文部英米文化学科准教授）



2019年11月3日（日）
第22回「麻雀の誕生」を語る
大谷通順（北海学園大学人文部日本文学学科教授）



ソーゴー印刷と中川町によるインターンシップに参加

2019年9月、人文部学生4名がソーゴー印刷株式会社、そして6名がソーゴー印刷株式会社 × 中川町のインターンシップ・プログラムに参加しました。この2つのインターンシップは、2018年に本学部とソーゴー印刷株式会社が結んだ連携協定により



今年度から行われています。参加学生はそれぞれ、同社刊行の雑誌の企画、取材、編集等を体験し、調査力・文章表現力等を実践的に磨くこと、そして、中川町では新たな文化・産業・観光の創出による地域振興の取り組みや働き方について学びました。このインターンシップは来年度以降も継続予定ですので、興味のある人文部学生はぜひご参加ください。

第7回北海道観光・地域振興特別講座×鶴雅ホールディングス株式会社を開催

2019年11月8日（金）に第7回となる講座を開催しました。今回は、鶴雅ホールディングス株式会社代表取締役社長の大西雅之氏をお招きし、「北海道における地域の自立と持続」をテーマに講演を開催しました。本講演では、北海道における地域の自立と持続という観点から、観光の可能性と課題についてお話しいただきました。

人文学部特別講演会・人文学会第7回大会レポート

2019年10月ドイツよりミュンヘン大学名誉教授のF・W・グラーフ博士をお招きし、以下の人文学部特別講演会および人文学会第7回となるシンポジウムを開催しました。当日は、教員、コメンテーター、フロアの方々と講演内容や今後の課題について活発な議論を交わしました。

2019年10月5日（土）
北海学園大学人文部特別講演会
札幌市・ミュンヘン市姉妹都市
友好公開講演会

「ヨーロッパの多様性とEUの現状」

講師：F・W・グラーフ
（ミュンヘン大学名誉教授）

2019年10月7日（月）

司会：大森一輝（北海学園大学人文部教授）

講演「人文学の学問性をどう担保するか」

F・W・グラーフ（ミュンヘン大学名誉教授）

「人文学の学問性と研究不正 - 最近の事例より -」

小柳敦史（北海学園大学人文部准教授）

コメンテーター 須田一弘（北海学園大学人文部教授）

J・ブシャー（北海学園大学人文部准教授）

ヒューマン 2020.2 Vol.14

表紙キャッチコピー：

文化についての深い理解を涵養することが異文化社会に生きる人々と真のコミュニケーションを結ぶ力になる、という人文学教育の理念をあらわしたものです。

文化を学ぶ 世界と繋がる



北海学園大学 人文学部 日本文学学科(1部・2部) / 英米文化学科(1部・2部)



〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 TEL.011-841-1161(代表) FAX.011-824-7729

URL <http://human.hgu.jp/>

制作・印刷：(株)アイワード PD：馬場康広 [(株)アイワード 2000年人文部日本文学学科卒]